

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

病害虫発生予察情報について

標記について下記のとおり発表したので送付します。

病害虫発生予察 特殊報 第 1 号

病害虫名 : タマネギえそ条斑病

(病原ウイルス アイリスイエロースポットウイルス *Iris yellow spot virus* : IYSV)

1 発生作物 タマネギ

2 発生地域 泉州地域

3 発見の経緯

- (1) 令和 4 年 5 月、泉州地域のタマネギ栽培ほ場において、葉に条斑状の黄化が生じ、一部の葉が萎凋・枯死する症状が確認された (図 1~3)。
- (2) 地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所において、RIPA 法 (イムノクロマト) による検定を行った結果、IYSV によるタマネギえそ条斑病であることが確認された。
- (3) 本ウイルス (IYSV) による病害は、平成 8 年に千葉県のアルストロメリアで初確認されて以降、全国 30 以上の都府県のタマネギ、ネギ、トルコギキョウ、テッポウユリなど様々な作物で発生が確認されている。近隣では、和歌山県のトルコギキョウ、京都府のネギ、トルコギキョウ、兵庫県のネギ、タマネギ、トルコギキョウ、テッポウユリ、滋賀県のネギ、トルコギキョウでの発生が過去に報告されている。
- (4) 本府において、本ウイルスによる病害が確認されたのは今回が初めてである。

4 本病の特徴

- (1) 被害株の病徴は、はじめ葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、病勢が進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。発病程度が激しくなると、鱗茎の肥大が悪くなり、減収する。
- (2) 17 科 40 種以上の植物で IYSV の感染が確認されており、ネギ、タマネギ、ニラ等のユリ科野菜や、トルコギキョウ、アルストロメリア等の花き類で被害が大きい。
- (3) 本ウイルスはネギアザミウマ (図 4) が感染植物を吸汁することによって媒介され、一度ウイルスを獲得したネギアザミウマは死ぬまでウイルスを伝搬する。また、本ウイルスは種子伝染や土壌伝染はせず、管理作業による汁液伝染の可能性も低いとされている。

5 防除方法

- (1) 本ウイルスに対する有効な薬剤はないため、媒介昆虫であるネギアザミウマの早期発見・早期防除に努め、本虫の発生初期に薬剤散布を実施する (表)。なお、薬剤防除の際は、薬剤抵抗性害虫の出現防止のため、同一系統の農薬の連用を避け、ローテーション防除を実施する。
- (2) 伝染源や本虫の増殖源となるほ場内及び周辺の宿主植物や雑草を除去する。また、発病株の残さも周辺の野外に放置すると、伝染源となるため適切に処分する。
- (3) 施設栽培では、施設開口部に防虫ネット (0.4mm 目合以下の白色または 0.8mm 目合以下の赤色ネット等) を設置するとともに、施設周囲に光反射シートを敷設し、本虫の施設内への侵入を防ぐ。
- (4) ネギアザミウマが寄生する作物 (タマネギ、ネギ、ニンニクなど) の残渣をほ場に放置すると、本虫の発生源となるので、適切に処分する。

表 タマネギ ネギアザミウマ（※はアザミウマ類で登録）の登録薬剤

薬剤名 (成分名)	系統 (IRAC)	希釈倍数	使用時期/ 使用回数	使用方法
グレース乳剤 (フルキサメタミド)	イナキサリル系 (30)	2,000～3,000 倍	7日 / 2回	散布
※モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	ネコチノイト系 (4A)	2,000 倍	7日 / 3回	散布
※ディアナ SC (スピネトラム)	スピノシン系 (5)	2,500～5,000 倍	前日 / 2回	散布
プレオフロアブル (ピリダリル)	不明 (UN)	1,000 倍	3日 / 2回	散布

(注意) ネギ、ニンニク、ニラ等タマネギ以外の作物で使用する場合は、登録のある薬剤であることを確認すること。

◎防除薬剤については、

- Web 版大阪府農作物病害虫防除指針
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>)
- 農林水産消費安全技術センター農薬登録情報提供システム
(<https://pesticide.maff.go.jp/>)
で確認してください。



図1 発病株（紡錘型のえそ条斑）
(地方独立行政法人 大阪府立
環境農林水産総合研究所提供)



図2 病斑（紡錘型のえそ条斑）
(地方独立行政法人 大阪府立
環境農林水産総合研究所提供)



図3 病斑が拡大した発病株



図4 ネギアザミウマ成虫
(地方独立行政法人 大阪府立
環境農林水産総合研究所提供)